

震災で廃校の校章 ガラスで永遠に

東日本大震災で廃校となった福島県浪江町の九つの小中学校の思い出を永遠に未来につなぐと、富山ガラス造形研究所教授の松藤孝一さん(52)＝富山市＝とガラス作家の草薙聖子さん(48)＝同＝がデザインしたガラス製の校章を組み込んだ九つのモニュメントが、2027年春にJR浪江駅近くに設置されることが決まった。松藤さんらは富山のガラス文化が復興のシンボル制作に貢献できると期待しており、4月から富山を拠点に校章などの本格的な制作に取り掛かる。

富山の作家がモニュメント制作

復興のシンボル

福島・浪江町 27年に設置

浪江町は震災前、約2万1500人が住んでいたが、2011年の震災後、多くの町民は町外へ避難した。その後、町民は少しずつ戻り、現在は約2200人が住んでいる。震災時に浪江町には六つの小学校と三つの中学校があったが、震災後に小中学校1校ずつに再編され、震災前の九つの小中学校は4年前にすべて閉校になっている。

町は、にぎわいを取り戻すためJR浪江駅周辺の開発を進めており、駅東側に震災前の九つの小中学校の校章を組み込んだ復興のシンボルとなるモニュメントの設置を決めた。

町は昨年、ガラスを使ったモニュメントのデザインを募集し、全国9組の中から松藤さんと草薙さんの案が選ばれた。審査は建築家の隈研吾氏、美術評論家で富山市ガラス美術館名誉館長の伊東順二氏、浪江町長の吉田栄光氏が務めた。

松藤さんらによると、モニュメントは円形で、浪江町のシンボルであるコスモスの形と校章を組み合わせた。直径約1.8メートル、高さ約40センチで、ベンチとして使われる。彫刻した石こうにガラスを流し込むと重さ100キログラムの円盤となり、ガラスの中に校章が浮かび上がる。校章は稲穂や桜、海、山といった自然がモチーフで、ガラスの色もそれぞれにちなんだ色にする。

松藤さんは浪江町生まれで、東日本大震災を機に、ウランガラスの作品を製作している。兵庫出身の草薙さんは、阪神淡路大震災を経験。2人は町の復興の力になろうと作品案を練り上げた。

松藤さんは「新たなスタートを切った浪江に人が集い、町民が戻ったときに校章を見ているんだと思う。後世につなぐ場所にしたい」、草薙さんは「作品応募を通して福島の実情を知った。富山で学んだガラス技術で復興を手伝いたい」とそれぞれ今後の制作に意欲を示している。

審査員の伊東氏は「富山の美しいガラスで、福島心の風景を再建したい」としている。

松藤さんは「新たなスタートを切った浪江に人が集い、町民が戻ったときに校章を見ているんだと思う。後世につなぐ場所にしたい」、草薙さんは「作品応募を通して福島の実情を知った。富山で学んだガラス技術で復興を手伝いたい」とそれぞれ今後の制作に意欲を示している。

松藤さんは「新たなスタートを切った浪江に人が集い、町民が戻ったときに校章を見ているんだと思う。後世につなぐ場所にしたい」、草薙さんは「作品応募を通して福島の実情を知った。富山で学んだガラス技術で復興を手伝いたい」とそれぞれ今後の制作に意欲を示している。



作品について話し合う松藤さん(左)と草薙さん
＝富山市の富山ガラス造形研究所



モニュメントの校章部分のイメージ



モニュメント全体のイメージ